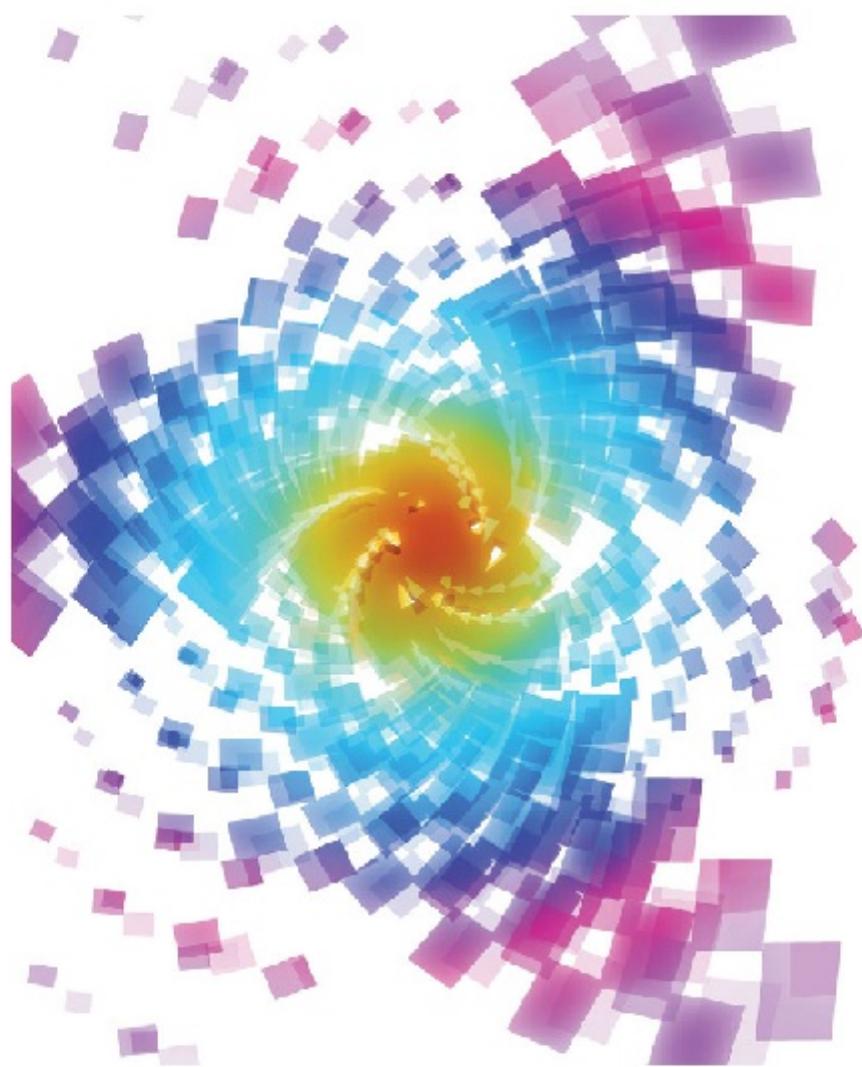


私のバイブル：

高野文子 『絶対安全剃刀』



堀田耕介

人生の転回点はいくつかある。この世に生まれたこと自体がそもそも転回点だが、最初の転回点、物心ついたときのこと
は曖昧な忘却の彼方にある。しかしその次の転回点、自分が
一人の人間になっていくことに気付く戸惑いの時期、つまり青
春期は誰もが意識する大きな転回点だろう。

誰もがそうかもしれないが、私の人生にはいくつかの明るい時
期といくつかの暗い時期があってそれが繰り返されてきた。その
明暗のコントラストの激しさの自覚が、私にバロック美術を好き
にさせたのではないかと思うほどだ。あのカラバッジョの、そしてス
ペインバロックの明暗の激しさ。22歳の時にスペインを旅した私

は、スルバランやリベラのあの明暗のコントラストの激しさに心を打たれ、いつまで見ても飽かなかった。本当はレコンキスタやサグラダ・ファミリアに興味があって訪れたのだけど、行ってみるとスペイン黄金世紀の建築やバロックの巨匠たちの絵画に強くひかれた。それらは主にプラド美術館で見たのだが、その特別館でスペイン国内で初めて公開された『ゲルニカ』に出会い、バルセロナのピカソ美術館にも行ってピカソがすっかり好きになったり、本当にこの旅は自分の価値観を大きく変えた。旅の直前にも失恋を契機に深い暗黒に落ちていたのでそこから這いあがり今まで見たことのないような明るい世界に出た印象が強かった。

私は中学の暗黒時代にマグリットに出会い東京へ行くことができたらくさんの絵を見たいと思っていたのだけど、基本的には田舎の囚人でずっとそういうものに渴いていたことさえ気が付かなかった。断片的に友達経由や学校の図書館から入ってくる情報を集めてその一つ一つを大切な思い出にし、自分の情操を形作ったのだと今では思う。高三の時に個性的な生徒の多い高校に転校し、いろいろ新しいものにも触れたけれど、その時の友人の一人が紹介してくれたのが高野文子だった。

晴れて東京へ出て、大学生協や渋谷の大盛堂、新宿の紀伊国屋書店などでほしい本を買い、西武美術館や西洋美術館で

の展覧会にも行くようになって少しずつ「世界」への目が開かれていったとき、目に入ってきたのが高野文子の初めての作品集、『絶対安全剃刀』だった。友人が見せてくれたのは単行本ではなく雑誌掲載の「アネサとオジ」で、なんだか不思議な作品だが線が特徴的で、こんな線、こんな描写の漫画もあるんだなあと感じていたのだけど、『絶対安全剃刀』を買って読んでみると、たちまちその世界に引き込まれた。今考えればまるで映画的な、あるいは演劇的な、それでいて漫画でしか絶対できないような描写、その当時の私が屈託のように抱えていた思考、そういうものにぴったりマッチしたのだろう。ある意味、今の若い女性が

浅野いにおの世界にはまるのと同じ心の動きがあったのではないかとも思う。

その後かなり長くの間、『絶対安全剃刀』は私にとってバイブルのようなものだった。一番大切な本、だと思い続けていた。その後に出された『おともだち』も『ラッキー嬢ちゃんの新しい仕事』も好きだったが、寡作な高野はなかなか新しい本を出さず、しばらくして『棒がいつぽん』が出た時には、高野自身の世界にも変化を感じたし、私自身も変わっていて、そこで道が二つに大きく分かれたような気がしたのだった。しかし『絶対安全剃刀』の世界、決して大きく広がっていくわけではないのだけど、自分の

身の回りをしんとした目で見て、その世界の奥にあるものを見ようとするような見方は、自分にとってすごく大事なことであり続けた。

同じように高校のころちらっと見て、東京に出てきてから本格的にはまった、というかその世界に入ってしまったのが演劇だった。高三の時にテレビで見た野田秀樹『二万七千光年の旅』がなかったら、私の大学生活、そしてその後の人生は大きく変わっていただろう。八〇年代初めから平成になるころまで、私は演劇に没頭していたけれども、でもその根底にあったのは本当は高野文子の世界だった気がする。別役実の不条理劇や唐十

郎のアングラ劇、野口三千三の身体の世界、竹内敏晴の心と体の関係、あの時代の最先端の演劇や身体論を体験し、上演し、そしてオリジナルへと進んでいったあのころ、それでもマイナーでパーソナルな高野の世界が自分の根底にあり続けたのだ。

こうして書いてみると、八〇年代は漫画も演劇も全盛時代だった。そして平成に入り、時代が変わりつつあったころ、私は高校の教員になり、気が付かないうちに人生が暗転して行っていた。

考えてみると、人生の明るい時期と暗い時期の違いは自分の支えになる本があるかないかということが大きいのかもしれない。

新しい仕事に就く前に、私は自分のバイブルになる新しい本を
探すべきだったのかもしれない。

私のバイブル：高野文子『絶対安全剃刀』

<http://p.booklog.jp/book/46862>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46862>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46862>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.